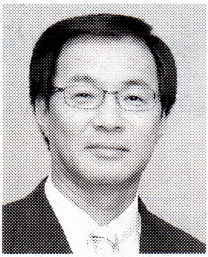
「命のバトンリレー 親から子・孫・ひ孫…」

東近江市長　西澤　久夫


西澤氏

「『幸せな死』があれば、そんな写真をとりたい」

戦場カメラマンとして、イラクやソマリアなどで取材をし、多くの戦場で死者を写真にとどめ、東日本大震災被災者の取材なども重ねてきた大津市在住のフォトジャーナリスト國森康弘さんが、私達に語りかけた言葉である。

そして、國森さんは、写真絵本シリーズ「いのちつぐ『みとりびと』」全4巻（社団法人農山漁村文化協会発行）を出版し、医療や介護関係者の間で反響を呼んでいる。東近江市の永源寺地区を舞台の中心にした、高齢者を自宅で看取る現場の記録だ。

静子おばあちゃんが息をひきとったあと、ひたいにひ孫の恋（れん）ちゃんが「ずっと大事にしてくれて、ありがとう」とキスをしているシーンは、ひいばあちゃんの静子さんの命を恋ちゃんが引き継いだ瞬間のように思える。在宅で家族や近所の人と別れを惜しむように接しながら、最後を送る。これこそ、戦場カメラマンだった國森さんが、自分の足元で見つけた「幸せな死」なのだろう。

すべての人は、必ず死ぬ。死をどう迎えるかは、どのように生きるかにつながる。そして、どのように命を引きつぐか。

ひるがえって、大津市の中学2年生の「自死」の問題は、私には理解を超えた状況になっている。「社会、経済、組織などのヒズミの最悪の結末が『自死』です。私は、自死した息子の母親として、同じ経験者をつくりたくない」。息子さんを「自死（自殺）」で亡くしたあるお母さんの言葉である。

すべての関係者が、このお母さんの言葉を胸に刻んで生きなければならない。

人は必ず死ぬが、自分の命は誰かに必ず引き継いでほしい。決して、自ら死を選ぶべきではなく、人生は必ずまっとうしてほしい。そして、その最後の時をできるだけ多くの人が看取ってほしい。

「あっちでまっててや。私もあとでいくさかい」「いろいろありがとう」、こんな会話が最後であれば…。

それが、命のバトンリレー。